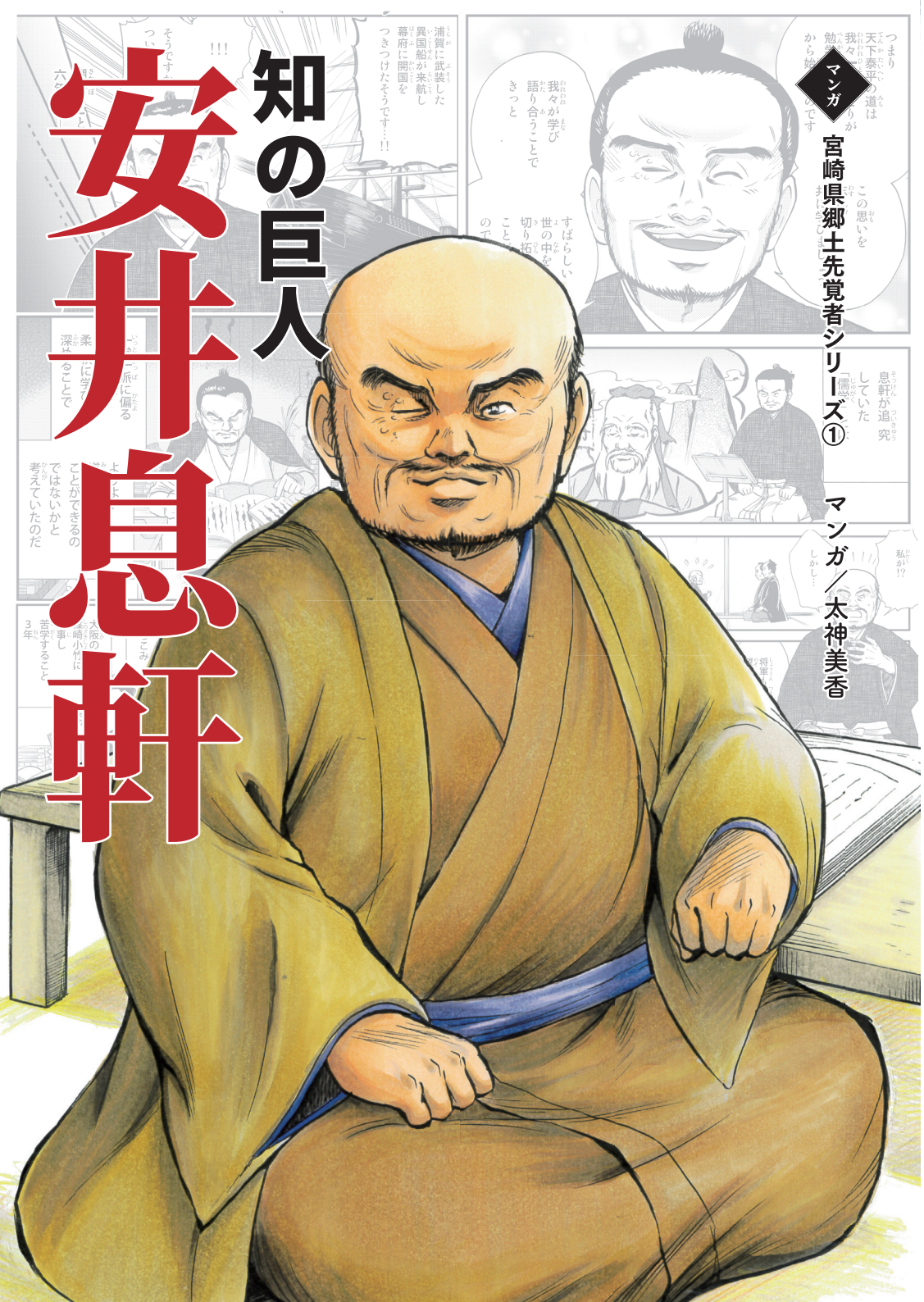


マンガ宮崎県郷土先覚者シリーズ①　**知の巨人 安井息軒**

令和3年3月 発行

発　行／宮崎県
〒880-8501　宮崎県宮崎市橘通東2丁目10番1号
宮崎県 総合政策部 みやざき文化振興課
TEL : 0985-26-7117　FAX : 0985-32-0111

協　力／特定非営利活動法人安井息軒顕彰会・宮崎市安井息軒記念館

マンガ／太神美香

制　作／㈱梓書院
〒812-0044　福岡県福岡市博多区千代3丁目2番1号
TEL : 092-643-7075　FAX : 092-643-7095

©2021 宮崎県　Miyazaki,Prefecture printed in Japan.

外務大臣として
不平等条約における
治外法権の撤廃に
成功した
陸奥宗光

司法省の
官僚として
大日本帝国憲法の
制定などに関わり
近代法治国家の
もとを築いた
井上毅

外務大臣として
関税自主権の回復や
ポーツマス条約の
調印など
日本の世界的な
地位向上に貢献した
小村寿太郎

日本が幕末から
近代的な
「法治国家」と
して成立する
ためのもとを
築いた彼らには

ひとりの
共通する
「師」の存在が
あった！

三計塾
――それでは講義をはじめます
二千人以上の弟子達を輩出し日本近代国家の原動力となる「知」を支えた
近代法治国家の父であり知の巨人
安井息軒である

＊清武郷：現在の宮崎県宮崎市清武、田野、赤江、木花、青島

＊仲平：息軒の本名

＊今は音を忍が岡のほととぎす いつか雲井のよそに名のらむ：いつかは天下に名を知られる人物になる、という決意を表した書

そして一八三八年
さらなる学問の
探究をめざして
家族とともに再び
江戸に上った息軒（39歳）は

三計塾

翌年私塾
「三計塾」を
開いた

午前
四時

チュン
チュン

おきるぞっ

ふぁ〜

ZZ

僕の考えは…

いや、ここは
こうだ！

ガラッ

！

今日は新しい塾生がいるようですね

では儒学の基本というべき『大学』の八条目について改めて考えてみましょう

修身斉家治国平天下…つまり

修身斉家治国平天下

天下泰平のためにはまず我々が勉学に励むことが重要だと説かれています

学問をし身を修めれば立派な人になることができる

立派な人になれば家を斉える つまりよい家庭を築くことができる

よい家庭が増えるにつれ国は治まっていく

国が治まれば天下泰平の世となる…

つまり天下泰平の道は我々一人ひとりが勉学に励むことから始まるのです

この思いを決して忘れず共に学びましょう

我々が学び語り合うことできっとすばらしい世の中を切り拓いてゆくことができるのです

息軒が追究していた「儒学」とは

古代中国で「孔子」が説いた儒教から発する学問である

真理を求め
人の生き方や
国のあり方を説いた
儒教は
中国の官僚試験
「科挙」のテキストとされ
日本でも
武士の教養として
親しまれてきた
その解釈は様々で
陽明学や
朱子学などの
宗派が誕生
陽明学
朱子学
林羅山
中でも「朱子学」は
江戸幕府の
公式の学問とされ
時の要人や学者たちは
みな朱子学者
であった
そんな中
新しい解釈も
評価しながら
原典と比較検討し
忠実に
読み解いていく
古学や考証学の
立場をとったのが
息軒である
一つの考え方に
偏ることなく
広く柔軟に学びを
深めることで
よりよい
道を追究する
ことができるの
ではないかと
考えていたのだ

約五十年間で
二〇〇〇人以上の
弟子たちを育てた
息軒はまさに
日本の知力を
牽引した人物
だったともいえる

ダダダ
ガラッ
先生
大変です!!
浦賀に

浦賀に武装した
異国船が来航し
幕府に開国を
つきつけたそうです…!!
!!!
そうか
ついに…
遡ること
六年前

息軒は江戸に通じる房総・相模・伊豆の海岸をつぶさに視察していた

日本は島国ゆえこれまで異国に征服されたことがない

しかし…

欧米の科学技術や軍事力は日本をはるかに凌いでいるように思える

やはり海岸の防備が圧倒的に足りない…

近い将来日本に開国を迫ってくるのは間違いないだろう…

しかし今のままでは圧倒的な武力にものを言わせて強引な要求をされてしまう

あの大国・清ですらなにもできず負けてしまったのだから…!!

一八五三年
幕府の中枢
徳川斉昭が
息軒（54歳）を呼ぶ

先般より異国船が
やってきては
開国を迫ってきておる

徳川斉昭

幕府内でも
意見が割れてな…
焦るばかりだ

見識が深いと
言われるそなたの
意見をききたい

私は
数年前より
近隣の海岸を視察し
あらゆる書を読み
洋学者とも交わり

私の考えを
このようにまとめて
おりました

私の見立てでは
アジアは
暮気であり

欧州
ピーク
アメリカ
アジア
朝 ← 昼 → 晩

欧州は午気
アメリカは朝気
であります

息軒は
諸外国の勢いを
一日の流れに例え

いずれは
アメリカが
勢いを増すと
予測していた

いま勢力を
拡大している
アメリカに
対抗するには

まず国力を
高め軍事力を
強化することが
急務です

特に海防は
まるで足りて
おりません

なるほど…
しかし…

その危機感を持った者たちがどれほどおるだろうか…

いかにして国力を高めることができるだろうか

「足食足兵民信之矣……」

論語に書かれている言葉です
国民の食べ物を十分にすること
兵器兵隊を備え
特に海岸の防備を固めること

そして何よりも国民の信頼を得ることが最も大切です

なるほど…実によい言葉じゃ

そなたに話を聞いてよかった！

息軒は開国を拒むのであれば諸外国との武力差をよく認識し
もっと海防と軍備を充実させるべきだと説いた
古典を学びながら学派を超えて儒学から法学果ては洋学まで学んだ息軒の卓越した見識は
諸外国の脅威と我が国との国力差を鋭く見抜いていた
一八六二年
息軒殿！
あなたを昌平坂学問所の教授として招きたい
幕府の役人

私が!?
しかし…
そちらの教授には朱子学者しかなれぬのでは…?
将軍も強く望んでおられる
ぜひともお引き受けいただきたい
江戸城
第14代将軍 徳川家茂
…私も高齢なれば恐れ多くもこの大役辞退させていただきたいと思っておりました
しかし将軍様たっての命とあらばおひきうけしない訳にもいきません

このお話

ありがたく
お受けさせて
いただきます

昌平坂
学問所は
幕府の直轄の
学問所――
いわば国の
最高学府である
栄養失調に
なるほど
生活をきりつめて
まで苦学してでも

天下の儒学者に
なることを志し
学び続けた息軒（63歳）が

ついに学者として
頂点に立った
瞬間であった

一八六八年
明治という
新しい時代の誕生への
動きのなかで
国内には混乱が
生じていた

弟子たちの
すすめもあり
息軒は江戸を離れ
領家村（埼玉県川口市）
に疎開する

翌年縁あって
彦根藩の屋敷に
身をよせていた
時…

明治天皇の
先生になって
ほしいと

二人の男が
訪ねてくる

山岡鉄舟

勝海舟

先生は江戸幕府が
始まって以来の
大儒学者と誰もが
認めております

どうか…

…お気持ち
はうれしい
が寄る年波
にはかな
いませぬ

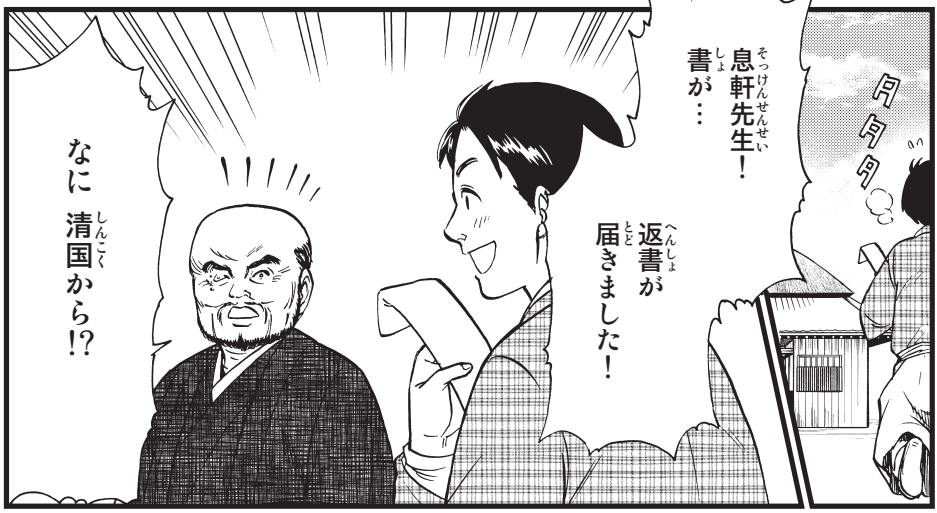
私が教えずとも私の元から巣立った門弟たちがおります

彼らこそ次代を担う希望です

彼らと共にどうかよい国づくりを…

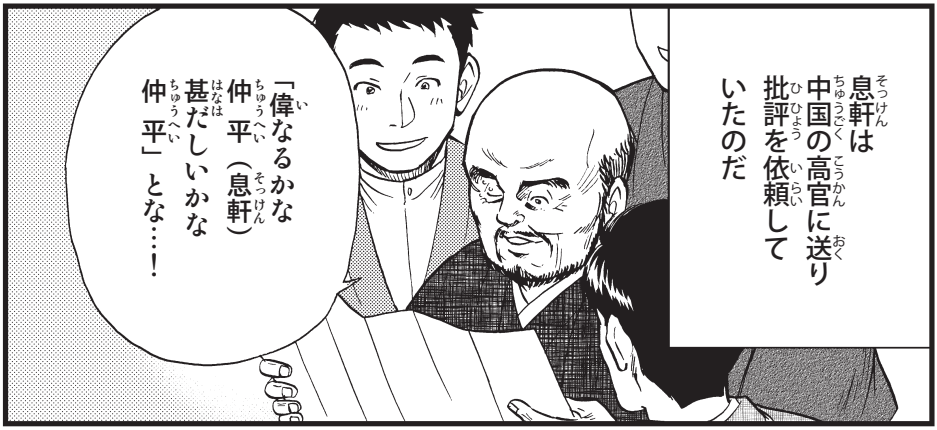
高齢と病を理由に辞退した息軒だったが当時誰もが天下一の学者と認めていた彼の元には

晩年まで教えを請う人が後を絶たなかった



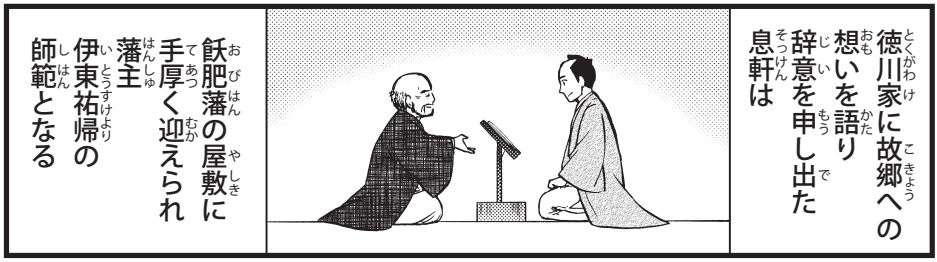
息軒が六十五歳の時に書き上げた『管子纂詁』

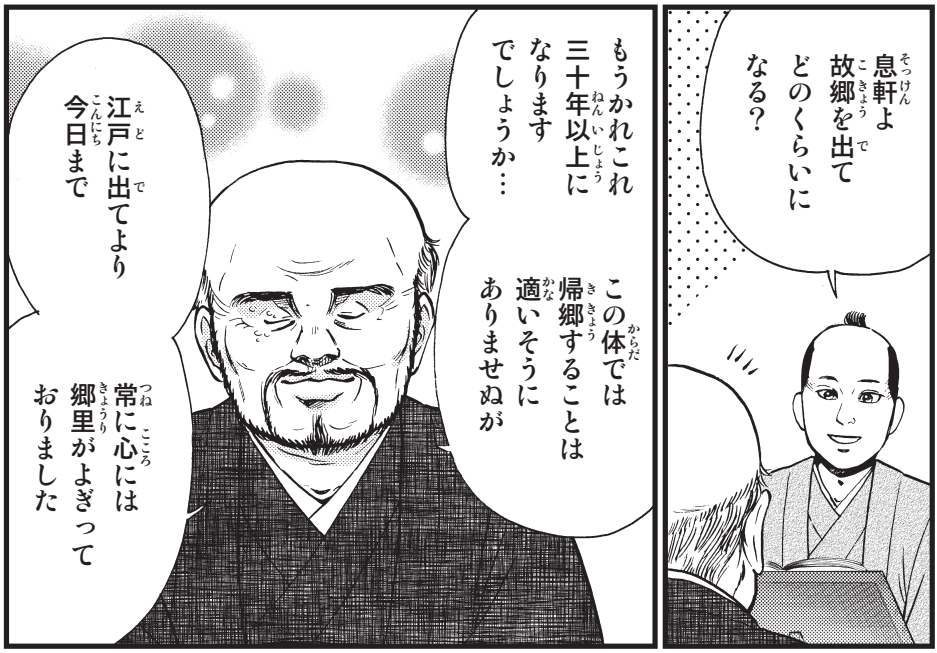
中国でも難解とされ研究を進められなかった『管子』を見事に解説したこの本を

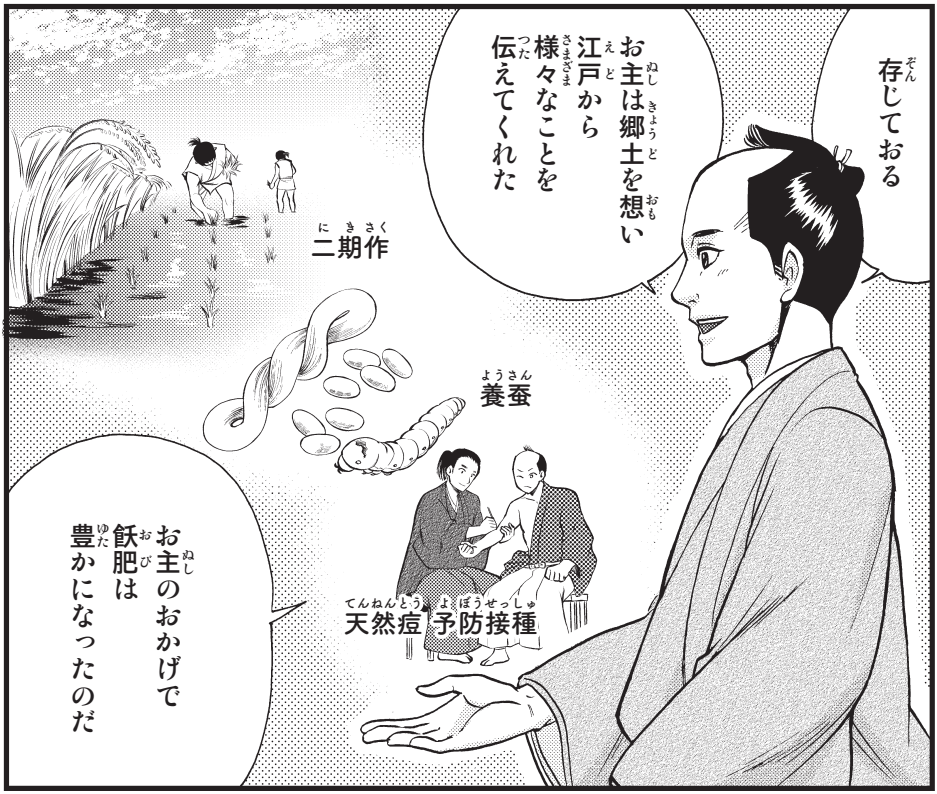


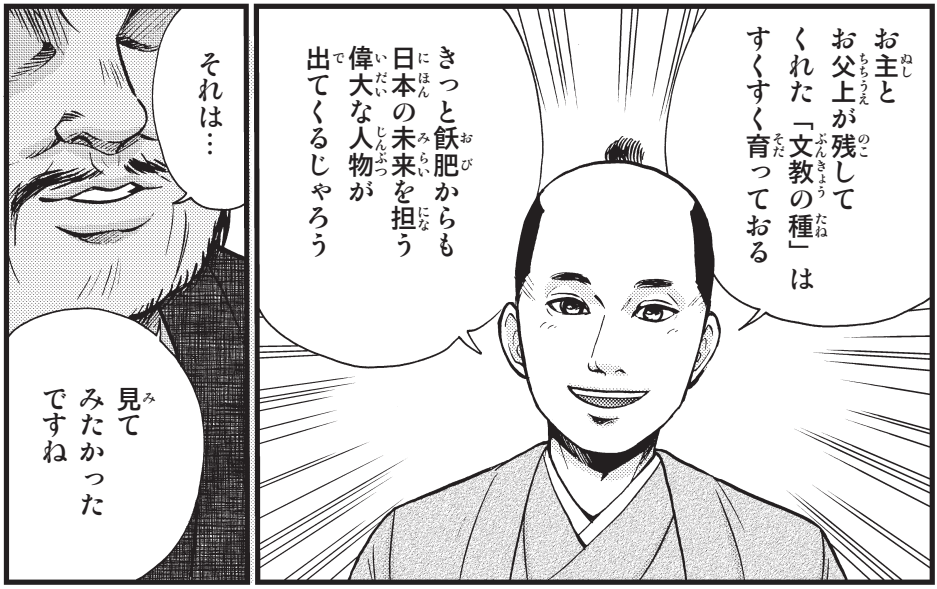
徳川家

これまで将軍様に直接お仕えして参りましたが…私も老い先短い身
故郷 飫肥藩の行く末が気がかりでなりませぬ


徳川家に故郷への想いを語り辞意を申し出た息軒は
飫肥藩の屋敷に手厚く迎えられ藩主伊東祐帰の師範となる


息軒よ故郷を出てどのくらいになる？
もうかれこれ三十年以上になりますでしょうか…
この体では帰郷することは適いそうにありませぬが
江戸に出てより今日まで
常に心には郷里がよぎっておりました


存じておる
お主は郷土を想い江戸から様々なことを伝えてくれた
二期作
養蚕
天然痘予防接種
お主のおかげで飫肥は豊かになったのだ


お主とお父上が残してくれた「文教の種」はすくすく育っておる
きっと飫肥からも日本の未来を担う偉大な人物が出てくるじゃろう
それは…
見てみたかったですね

維新という変革の時を迎えても

我々一人ひとりが真剣に学び

決して命を粗末にすることなく粛々と生き永らえていけば十分なのです

身を修めることがよりよい国づくりと

天下の泰平につながるのですから

息軒は
「玉砕」と対局をなす
「瓦全」という
言葉を残し

一八七六年
七十七歳で
この世を去った

しかし息軒の残した
「知の遺産」と
三〇〇〇人を超える
弟子たちの
想いは確実に
後生へ受け継がれ
人々の生活を
豊かにし

今なお
私たちの心に
受けつがれている

知の巨人・安井息軒をめぐって

学問に生涯を捧げ、国と故郷のために学び続けた安井息軒は、約2千人の優秀な人材を育てました。明治天皇の教師を依頼されるほどの息軒のもとには、全国の藩主（知事）や現役の官僚たちも多数集まり、日本の急速な近代化を支える原動力となりました。

息軒の苦学を支えた「仲平豆」

21歳の時、学問を志して大阪へ向かった息軒でしたが、父から預かったお金（10両）を無駄にするまいと、大阪で学んだ3年間で外食したのはたったの3回。毎日、醤油と塩で煮詰めた大豆をおかずにご飯を食べていたそうです。友人たちは、究極の節約おかずとも言えるこの豆を、息軒の本名にちなんで「仲平豆」と呼ぶようになりました。

息軒を支えた妻「佐代」

息軒が28歳の時、父・滄洲は、清武郷今泉村岡に住む川添家のお豊に仲人を介して結

婚話を持ちかけましたが、破談に。ところがその話を聞いていた妹の佐代が「私でよければ仲平さんの嫁になりたい」と申し出て、息軒は佐代と結婚しました。佐代は「岡の小町」と噂されるほど美しくやさしい娘で、15歳とは思えない甲斐甲斐しい働きぶりを見せました。森鷗外は小説『安井夫人』の中で、佐代を〝美しき半身〟と称し紹介しています。

生涯息軒に寄り添い、質素な生活に文句一つ言わなかったとされる佐代。息軒が幕府儒官に到達する直前、50歳の若さで亡くなりました。

三計の教え

『一日の計は朝にあり、一年の計は春にあり、一生の計は少壮の時にあり』

息軒が開いた私塾「三計塾」の名前の由来となっている三計の教えです。何事も初めが肝心であるという考え方で、「今日という日は二度と戻らない。だから一日一日を、その日その時を、大切にしっかり勉強しなさい」という教えです。

半九の精神

『百里の道を行く者は　九十里をもって半ばとす』

「百里を行く者は、九十里を半ばと考えるべきだ。最後の十里が難しい」という意味

で、事を始めるのはたやすいが、最後まで成し遂げるのは難しいことのたとえです。息軒はこの言葉を好み、自分の名前にその一部をとって半九とつけたほどでした。宮崎市清武文化会館「半九ホール」の名前の由来にもなっています。

敬老のすすめ

息軒は、『救急惑問』という本の中で、「日本の人々の生活や習慣は、世界の国々とくらべてすぐれています。しかし、お年寄りを大切にする心はおとっています。よい教えが、人々の間に広まっていないからです。このよくない点を改めるには、まずお年寄りを集めて、敬老の会を始めたらよいのです。」と書き、そのためのいろいろな方法を述べています。

元治元年（1864）、息軒の念願がかなって、飫肥と清武で敬老の会が行われました。子どもや孫に付きそわれた老武士たちがお城に招かれ、殿様や家老のお話があった後、たくさんのごちそうをいただきました。そのころの食事は、一汁一菜といってとても質素なものでしたが、その日は、一汁三菜のほかに魚2品と酒がふるまわれました。老武士たちは、大変喜び、昔の話をしながら、楽しい一日を過ごしました。また、町人や農民にも、代官所などで同じようなことが行われました。

このように、「老人を敬うことは、人として大切な道です。」と150年前に息軒は殿様に進言し、敬老の会を実現させたのです。

（『郷土の偉人　安井息軒』清武町教育委員会平成2年版より）

たくさんの本にも登場する安井息軒

息軒は多数の著作を残しましたが、息軒が登場する本もまた多数出版されています。明治の文豪、森鷗外が息軒の妻・佐代を題材にした小説『安井夫人』を執筆したことに代表されるように、息軒は誰もが認める「知の巨人」であり、全国に名を轟かせる有名人であったことが伺えます。

〈安井息軒を取り上げた主な書籍〉

池波正太郎『戦国と幕末 乱世の男たち』／司馬遼太郎『飛ぶが如く』／永井荷風『下谷叢話』／永井荷風著・磯田光一編『摘録 断腸亭日乗』／夏目漱石『吾輩は猫である。』／藤沢周平『回天の門』／藤沢周平『雲奔る 小説・雲井龍雄』／森鷗外『渋江抽斎』（著者名五十音順）

安井息軒　略年譜

年号	年齢	内　容
1799	0	旧暦 1 月 1 日、飫肥藩清武郷中野に儒学者安井滄洲の次男として生まれる。
1818	19	父と初めて 2 人で延岡へ旅し、一緒に漢詩をよむ。（延岡紀行文『卯の花』）
1820	21	10 両のお金を持って、大阪の篠崎小竹（しのざきしょうちく）に師事し、蔵屋敷の一室で自炊。 ３年間苦学。（仲平豆で切り詰め）
1824	25	江戸（東京）の古賀侗庵（こがどうあん）に師事し、昌平坂学問所（昌平黌）に入所。 学問所で親友の塩谷宕陰（しおのやとういん）等との交流を開始。
1826	27	飫肥藩主・伊東祐相（すけとも）の侍読（主君に書物など用いて講義を行う役）を兼ねて江戸藩邸勤務を命じられ、4 月古賀塾を退き、8 月あこがれていた松崎慊堂（こうどう）の塾に入門。
1827	28	４月 松崎塾を退き、5 月藩主と一緒に飫肥に帰国。 岡の小町といわれた川添佐代（当時 15 歳）と結婚。森鷗外の『安井夫人』に詳しい記述あり。 ８月 清武郷の学校である「明教堂」が開設され、父とともに助教授として教育にあたる。
1831	32	飫肥藩校「振徳堂」が開校。父滄洲が総裁（校長）兼教授となり、息軒が助教に就く。 33 歳　飫肥藩で子供を間引く悪習を止めるよう藩主に進言し、悪い風習を廃止させる。
1835	36	父滄洲が 68 歳で没す。飫肥安国寺に葬られる。
1837	38	6 月幕府の学問所である昌平坂学問所に入寮。学問所の斉長となる。
1838	39	3 月一時帰国。6 月許しが出て藩職を辞し、家族とともに江戸に移住する。 油津から江戸までの旅の様子を記した紀行文『東行日抄（とうこうにっしょう）』を著す。
1839	40	旗本の家を借り、三計塾を開く。 塾のきまりである、「班竹山房学規（はんちくさんぼうがっき）」11 ケ条を定める。
1842	43	松崎慊堂の推薦で下総佐倉藩（老中　堀田正睦）の儒者になる。 飫肥地方大洪水。台風等の被害を軽減できる２期作を奨励する。
1847	48	房総、相模、伊豆の海岸を巡覧し、『海防私議（かいぼうしぎ）』を著す。
1849	50	上州の蚕業を視察し、飫肥に養蚕製糸を伝える。
1852	53	藩の決まりとして、飫肥家老の平部嶠南を通じて、飫肥藩の子どもたちに種痘を実施する。
1853	54	水戸藩主徳川斉昭より今後の幕政の在り方を問われ、外交・内政等を書にまとめ、見事に応える。
1855	56	徳川斉昭から息軒に「足食足兵民信之矣」の書を賜られる。
1862	63	・1 月 3 日妻佐代が亡くなる（50 歳）。高輪の東禅寺（たかなわのとうぜんじ）に葬られる。 ・9 月将軍徳川家茂（いえもち）に拝謁。 ・12 月、塩谷宕陰、芳野金陵（よしのきんりょう）と共に、幕府の御儒者（昌平坂の儒官として教授）となり、文久の３博士と言われた。（息軒が朱子学派以外からの初めての登用。）
1863	64	2 月幕府直参（じきさん：将軍家に仕えた旗本・御家人）就任。
1864	65	2 月福島県白河郡塙（しらかわぐんはなわ）の代官（63,900 石の天領）に任命される。 8 月息軒、高齢と病気を理由に願い出て免官となる。
1865	66	この頃、国内では攘夷封港論から勤皇と佐幕の衝突を繰り返し、各地で戦いが続く。
1868	69	戊辰戦争を避け、3 月 13 日川口市領家村の豪商高橋善兵衛家の新宅に家族や門人数名で疎開。（4 月官軍に江戸城を明け渡す。）11 月まで領家村に疎開し、毎日『北潜日抄』（ほくせんにっしょう）を書く。 11 月息軒著書『左伝輯釈（さでんしゅうしゃく）』出版のため、彦根藩井伊直憲の別邸に移る。
1869	70	3 月勝海舟と山岡鉄舟から明治天皇の侍講を依頼されるも辞退。 徳川家に申し出て飫肥藩籍に戻り、家老上席として、藩主伊東祐帰（すけより）の師範となる。
1870	71	三計塾生 136 名となり、最大を数える。
1872	73	元旦に「瓦全」の書を書く。 著書『論語集説』が出版される。
1876	77	9 月 23 日東京土手三番町の自宅で亡くなる（77 歳）。千駄木の養源寺に葬られる。 （最後を看取ったのが大奥の侍医や大正天皇の治療を勤めた漢方医浅田宗伯で、死因は胸の病気「澼飲症」であった。）